はじめに

関聡介　ただ今より、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの協働実践研究「渡戸・関班」のプレフォーラムを始めさせていただきます。最初に北脇保之センター長よりご挨拶をいたします。

北脇保之

北脇保之　ご紹介いただきました東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターのセンター長をしております北脇と申します。私どものセンターでは、日本の、そして世界の多言語・多文化社会について教育、研究、実践ということで、幅広い取り組みをしております。協働実践研究は2006年から足かけ3年にわたって、五つの班を組織して進めています。そのうちの一つが本日の「渡戸・関班」です。この班は町田市（東京都）と相模原市（神奈川県）を拠点として研究を続けてきました。今日はその一端を発表して皆さんと議論を深めていきたいと思っております。

大学の研究というとその地域に調査に来て、調査をしたら帰ってしまって、あとに何も返ってこないということを、よくいわれます。そういうことにならないように地域の皆さんと一緒に課題解決に取り組んでいき、その中で研究の成果を挙げていこうと進めておりますので、引き続きご協力をお願いする次第です。本日は活発なご意見をいただきたいと思いますので、どうぞ皆さん、よろしくお願いします。

関聡介

関　「渡戸・関班」では、行政境界、つまり行政区の境界を越えた協働連携をテーマに研究を行っておりまして、昨年（2007 年）度の成果は『越境する市民活動～外国人相談の現場から～』（シリーズ多言語･多文化協働実践研究 3）にまとめています。

本年度は、日本語支援に関する行政と市民の役割や連携、行政境界を越えた連携というものをテーマに、調査研究を進めています。先日は町田市と相模原市で公開研究会を開催させていただきました。本日は、そこでの議論をさらに進めるということで、プレフォーラムを開かせていただきます。

それでは、最初に「日本語を母語としない中学生のための日本語教室」の杉本薫さんからご報告をいただき、その後、若干の質疑を行いたいと思います。